

「私と父の日常」

福井県立高志中学校 3年 福島 つばさ (ふくしま つばさ)

私と父の仲は、良好とは言い難いです。

父は、昔から真面目で不器用な人だと、母は言います。私とは、ほとんど話をしません。むしろ、口を開けば「早く食べなさい。」に始まり「ちゃんと、片付けんであかんのや。」「早よ寝な、明日起きれんようになるんやで。いつまで起きてるんや。」などなど、小言ばかりです。中学校へ入ると、そんな父への苦手意識がとても強くなりました。

私の周りの友達には、お父さんと話すことが好きだと言う子が結構います。仲良く話すことがうらやましいと思うとともに、多少の劣等感を抱いてしまうのです。みんなが普通にできることが、何で家ではできないのだろうと。

中学二年生になってからは、必要最低限のことしか、私からは話さなくなりました。父も、

「わかった。」

くらいしか返しません。

これは、私のわがままかもしれませんが、小言だけだと、とても寂しいです。ちゃんと認めてほしいし、時には、ほめてほしいです。

「頑張ったね。」

この一言があれば、もっと心が軽くなるはずだからです。そして、私が悪いときには、ちゃんと叱ってほしいです。学校のテストで悪い点をとっても、母には、

「何がダメだったか、ちゃんとわかっている？わかっているなら、次頑張りなさい。」

と言われますが、父からは一切、声をかけられません。まるで、自分が無色透明になったように感じていました。

夏休みに入り、私は新型コロナウイルスに感染しました。高熱が続いたものの、回復し、後遺症も残りませんでした。しかし、この病気の本当の恐ろしさは、感染力だったのです。次に、母が感染してしまいました。そして、家の中が回らなくなりました。

今まで当たり前のように、母が一人でこなしていた料理、洗濯、掃除を二人で担わなければなりません。しかし、私は、どれもやりたくありませんでした。コロナで一週間止まっていた時間を取り戻すのに必死だったからです。残った課題の量と、夏休みの残り日数が私をいらつかせました。

けれど、当然夕方になれば、お腹が減ります。帰宅時間が遅い父に代わり、夕飯の用意をしなければなりません。寝ている母に

「何作ればいい？」

と聞くと、母はだるそうに答えました。

「冷蔵庫に、焼きそばあるけど、作れる？」

焼きそばくらい私にも簡単に作れるだろうと思い、キッチンへ行きました。キャベツ、人参、ピーマン、玉ネギを冷蔵庫から取り出し、皮をむき、洗い、刻みます。ただ、それだけの作業なのに、心のゆとりがなかった私は、工程が進むごとに、やる気を失っていきます。野菜を切り終え、肉をフライパンで炒める頃には、全て嫌になっていました。

夜、八時を過ぎた頃。

「つう、ご飯やぞ。」

私を呼ぶ父の声がしました。そして、食卓には、目玉焼きののった焼きそばが置かれていました。

おそらく帰宅した父が、キッチンを見て事態を察し作ってくれたのでしょう。普段、料理を全くしない父が作った目玉焼きは、焼き過ぎていて、黄身まで固くパサパサします。逆に焼きそばは、水分が多く残っていて、べちょっとします。けっして美味しくはありませんが、温かい料理は、胃だけではなく、心も満たしてくれます。

「ありがとう。」

感謝の気持ちを口にした私に、

「うん。」

父は、うなずくだけでした。相変わらず、不器用だと、私は思いました。

どんなに私が腹を立てて、父に怒ったとしても、次の日には、駅まで車で送ってくれます。下手ではあっても料理を作ってくれます。きっと、これらの行動が、父なりの私への愛情の示し方なのだろうと思います。今はまだ、反抗心の方が強いけれど、いつか普通に話せるようになるのでしょうか…。

その日のために、感謝の言葉だけは、私から伝えるための努力をしていきたいです。

「いつも、ありがとうー。」